下町文化 Koto
NO. 218
2002.7.15

発行
江東区教育委員会
生涯学習部生涯学習課
〒135-8383
江東区東陽4-11-28
TEL(03)3647-9819
http://www.city.koto.tokyo.jp/~bunkazai

『江東区の民俗』
深川編を好評販売中!!

平成13年度、江東区民俗調査団（団長中村ひろ子・江東区文化財保護審議会委員）は、平成10年度より継続してきた総合的民俗調査の締めくくりとして『江東区の民俗　深川編』（A5判　408頁　1000円）を刊行しました。これで一昨年度刊行した『城東編』とあわせて、江東区の民俗を知るための手引き書が揃いました。

ここはどこでしょう？大正15年以前の風景です。（答えは2頁本文中）

深川は、江戸時代の初頭から江戸御府内に含まれ、町場として発展してきました。特に霊巌寺・浄心寺を中心に多くの塔頭（たっちゅう）子院に囲まれた寺町、材木問屋が軒を連ねた木場、深川浜に成立した猟師町、隅田川沿いの倉庫街・佐賀町といった具合に非常に特徴のある町々がありました。近代には、多くの掘割を利用した機械工業の街に生まれ変わり、現在では高層マンションや企業ビル・商業施設が密集しているものの、いまだ江戸下町の雰囲気を感じさせてくれる地域でもあります。

江東区民俗調査団では、昭和56年度から区民の方々を調査員とした民俗調査を行ってきましたが、平成10年度からはこれまでの整理・まとめとして学術的総合民俗調査を行ってきました。

本書の構成は次のとおりです。

調査の概要／深川地域の歴史／生業／毎日の生活／人の一生／四季の行事／信仰／暮らしと歴史を刻み込む話

激変する歴史の中で人々はどのように暮らしてきたのでしょうか。かつての深川の景観はどのようなものだったのでしょうか。関東大震災前の岩崎別邸の洋館など初公開の貴重な古写真も掲載しています。本書から当時の人々の暮らしを少しでも味わっていただけたら幸いです。

なお、一昨年度刊行した『江東区の民俗　城東編』（価格1200円）の方も好評頒布中です。

■『江東区の民俗』深川編を好評販売中!!
■協力員に20人を委嘱
—文化財を守り伝えるために—
●船番所取調一件③
★将軍の御成りと中川船番所
●芭蕉記念館新展示
◎中世から近世の連歌師
◎芭蕉の人生と旅
●ここにも歴史があった
★家庭用箱風呂
■伝統工芸保存会
大岩仲治前会長に感謝状！

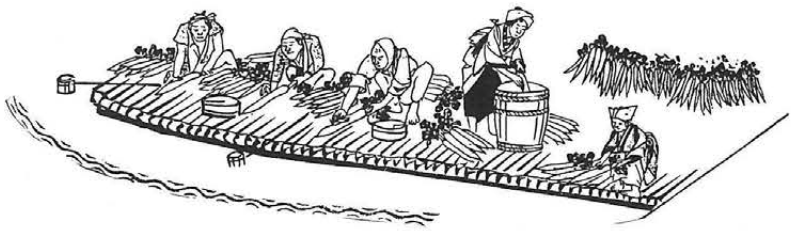
さて、『江東区の民俗　深川編』の表紙にも使用した1頁の写真は、大正15年（1926）5月に刊行された『深川区史　上巻』に収録されているもので、関東大震災前の和倉町の通りを写したものです。和倉町は、明治2年（1869）に蛤町・佐賀町代地・富岡町などの町々が合併して成立した町で、現在の深川1・2丁目、冬木のあたりです。油堀の北側に位置し、元禄14年（1701）に木場の開発と同じ時期に開発され、通称木場と呼ばれる地域に含まれる大和町の西に接しています。

昭和33年の住宅地図では、和倉町の油堀沿いに材木問屋と材木置場が並んでいます。この光景もこうした一画を撮影したものでしょう。往来の両側に建て掛けられた材木からは木の香りが漂ってくるようです。右脇には材木運搬用の荷車も見られます。『深川区史』ではこの写真について「深川の木場が如何に大規模のものであるかは今更説く迄もないが、ここから深川のカラーが作り出され、深川の幾つもの場面が色どられて来たのだと思ふと、深い感慨なしにはこの図をも見過されない」と木場への想いを綴っています。

深川木場は言うまでもなく、江戸時代から約300年にわたり、木材の集散地として江戸・東京の町を支え、また、木場独特の風俗や慣習はその文化にも大きな影響を与え続けてきました。

明治2年刊の『木場名所図会』などを見ると、12月に入ると年末年始の準備に忙しく、男女が入り混じって浮き木の上で大根を洗うのは木場独特の情緒だったそうです。

また、暮れに木場に来た山主は、集金を済ませると、正月まで滞在し、年始の接待を受けて帰りました。問屋は、雪の降ったあとには、川船を仕立て、雪景色の美しいところに船を止めて、雪見酒などを振る舞いました。所望されて川並が木遣りを聞かせることもあったようです。



木場の大根洗い（『木場名所図会』）

早くから木場は、雪景色のすばらしい名所として多くの浮世絵に描かれましたが、明治に入っても、材木商冬木家の屋敷神・冬木弁天が小林清親「武蔵百景」に描かれ、昭和になっても川瀬巴水などに描かれています。

木場の浮き木・沈み材の間には、鯉・鮒・タナゴ・鰻・手長エビなどが生息し、それを捕るために翡翠（かわせみ）・白鷺・かもめなどが入り乱れて飛び回っていました。鮒・タナゴなどを釣るために釣師も集まってきました。また、「鰻踏み」という、板をはいて泥の巣の中から鰻を追い出し、沈めた網で捕獲する方法もありました。

木場で仕事をしていた川並も独特の存在でした。川並とは、原木を筏に組んで、木置場まで運ぶ筏師のことです。仕事は、鳶口を使って原木を押したり引いたりしながら、筏を組んでいく作業です。親方のもと、何人かの川並がチームで作業をしました。その際、原木の寸法計測や体積の算出をし、目印を付けて、材木問屋に販売しやすくするのも仕事でした。川並の歌う木遣りは有名です。

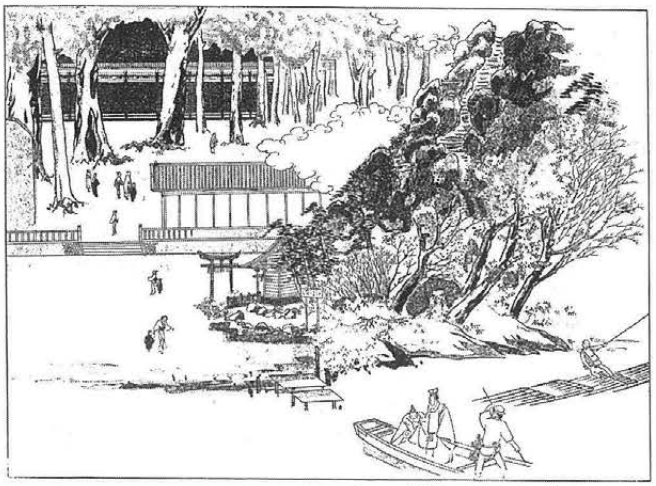
昭和50年はじめまで、木場周辺には縦横にめぐっていた堀に木材が浮かぶ光景を見ることができましたが、油堀は埋め立てられ、町の様相は一変し、やがてビルやマンションの建ち並ぶ町へと変貌をとげました。

このように深川を象徴する木場については、本書『江東区の民俗　深川編』のいたるところで触れています。江戸時代の木場については「深川地域の歴史」で、近代の木場・材木業については「生業」で、材木屋の住居は「毎日の生活」において、木場の葬式・木遣り念仏については「人の一生」の各項で解説されています。

是非、ご一読ください。

『江東区の民俗　深川編』（A5判　408頁　1000円）

＊江東区役所6階文化財係で頒布中。



和倉町より見た富岡八幡宮裏手（『木場名所図会』）

文化財を守り伝えるために

協力員に20人を委嘱

区民参加の文化財保護をめざす文化財保護推進協力員制度。去る4月11日、新たに20人を協力員に委嘱し、文化財保護の最前線で活躍していただくことになりました。昨年度委嘱の19人とあわせて、今年度は39人の協力員体制です。

文化財保護推進協力員の活動

文化財には、絵画・彫刻や石碑・燈籠といった石造物などの有形文化財、伝統的な工芸技術（職人さんの技）や「木場の角乗」に代表される民俗芸能などの無形文化財、というように、多くの種類があり、いずれも地域に残された貴重な文化遺産です。

これらの文化財を保護し後世に伝えるため、文化財保護推進協力員はさまざまな活動に取り組みます。文化財保護のために、区民の方々が活躍する場と言えるでしょう。

協力員会議終了後の班別打合せ

協力員に応募できるのは、教育委員会が開催する年間22回の「文化財保護推進員講習会」を修了し、次のステップの「中級研修会」（グループ研究）を受講した方々です。したがって応募者は、講習会をつうじて文化財に関する基礎知識と調査技術などを身につけています。

協力員の任期は2年間で、1期の定員は20人です。現在、再任は5期10年までとしています。任期中は、基本的に居住地を基準とした4班（深川北部・南部、城東北部・南部）に分かれて活動を行い、各班の連絡担当と書記担当が班内の調整にあたります。

具体的な活動は、調査・記録として①有形文化財の現況確認調査、②町並み変化を写真で記録する定点観測調査、普及活動として③史跡めぐりガイド、④民俗芸能公開の会場設営・警備、⑤伝統工芸展の解説・警備の5つがあります。

①現況確認調査は、屋外にある石造物などの文化財の現状を調査・記録するもので、協力員は、破損していないか、保存状態は良好か、きめ細かなまなざしで文化財を見つめています。毎年の調査数は約40件であり、班ごとに居住地周辺の文化財を調査します。登録時と現況の異なる文化財は、協力員の調査を踏まえ、調査担当文化財専門員によって登録台帳の訂正が行われます。

②定点観測調査は、1年間分約200か所の撮影場所と撮影方向を決め、3年サイクルで各地点の写真撮影を行います。すでに町並みが大きく変貌している場所もあり、失われた景観は、将来貴重な写真資料となることでしょう。

③史跡めぐりガイドは、地区別講習会と推進員講習会のプログラムとして行う史跡めぐりで誘導・解説をつとめます。先日行われた地区別講習会「砂町の歴史」では、受講生が、協力員の熱心な解説に耳を傾けていました。

④民俗芸能公開の会場設営・警備は、10月の区民まつりで公開される「木場の角乗」や「深川の力持」などの実演会場の設営と警備を行うものです。会場となる都立木場公園には毎年多くの人が訪れますが、華やかな演技を協力員が陰で支えているのです。

伝統工芸展は、職人さんが実演し、さまざまな作品を展示する展覧会で、⑤はその解説と警備を行います。会場は森下文化センター、会期は5日間ですが、小学校の団体見学が増えており、協力員の役割は年々増加しています。

このような諸事業の協力の他に、協力員には地域社会のリーダーとして、文化財保護・普及の啓発活動をすすめていただくことが期待されています。

定点観測プロジェクトチーム

区民参加による協力員活動は、文化財の保護と啓蒙活動に大きな成果をあげてきています。これまで紹介した活

平成13・14年度委嘱者

石見羽津映（海辺）
伊東　義男（東雲）
岩松　精（高橋）
岡本　勝群（東陽）
小澤　健一（北砂）
鬼沢　セイ（大島）
加藤　朝子（亀戸）
坂本　住子（大島）
佐々木武司（牡丹）
庄司　菊江（東砂）
土屋　正躬（枝川）
常澤　愛子（亀戸）
長　公子（牡丹）
長倉　眞生（白河）
福島　浩之（東陽）
水井　一男（東陽）
宮本　和子（東陽）
村島　晟介（南砂）
山本　利（東陽）

平成14・15年度委嘱者

浅野　清（大島）
安心院　研（南砂）
井戸　勝朗（南砂）
岩渕　和恵（大島）
宇田川純正（東陽）
大沼　千早（東陽）
小島　道子（清澄）
斉藤　恵子（千石）
櫻井　康敞（亀戸）
佐藤　幸子（亀戸）
清水　博（永代）
下川　清人（東陽）
白浜　智子（南砂）
田中　嘉明（扇橋）
中村　冨美（北砂）
日紫喜一史（猿江）
菱木　宏（大島）
福井　穂積（平野）
松澤　弘治（高橋）
芳野征太郎（亀戸）

動もそうですが、今年度は新たに定点観測プロジェクトチームが結成されました。

このプロジェクトチームは協力員の有志12人からなり、10年間継続してきた定点観測調査の成果を見直そうというものです。週1回のペースで活動しており、多くの問題点が浮かび上がってきました。

昨年度までの定点（継続撮影地）は886か所あり、継続撮影を行わない資料写真が696件あります。これらは定点観測カードに写真を貼りつけ、年度ごとにファイルして保存しています。しかし定点の全体が把握しにくいという難点がありました。そこでプロジェクトチームは、撮影地点と撮影方向を白地図に示した年度ごとの定点観測地図を作成し、最終的にはそれらを網羅した「定点観測地点一覧図」を作ることにしました。また資料写真も一枚の地図にその撮影場所を示して、「資料総合図」を作成する予定です。

定点観測プロジェクト・チームの作業風景（於、教育センター）

実際に作業を行ってみると、重複した撮影地点が多くあり、タイトルとしてふさわしくないものもありました。撮影場所のかたよりや、今後撮影が必要な地域など、さまざまな意見が出ています。「定点観測地点一覧図」の完成によって、これらの問題点が解決していくことでしょう。このような作業を通じて、景観の変化や町並みの移り変わりをあらためて認識しました。それは、私たちが暮らす町づくりとは何か、という問いかけでもあります。

協力員は、自分たちの活動の意義を再確認しながら、より良い地域社会の創造に向けて活躍しているのです。

次に、本年度委嘱を受けた方々のうち、5人の方に今後の抱負を語っていただきました。

郷土を感じる

亀戸　櫻井　康敞

亀戸に移り住んで30年以上になるが、勤務先に居ることが大半で、自宅はほとんど塒（ねぐら）のような存在であった。

俳句に親しんでいたので、芭蕉や石田波郷について知識はあったが、実地にその跡を訪れたこともなかった。

胸中に何か欠けているものを感じ、定年を機に郷土史の勉強をしようと考えていた折、区報で文化財保護推進員講習会を知り受講した。有名な神社仏閣、遺跡や古文書等だけではなく、身近に在るものも、先人が活動した証としての大切な文化財であることを改めて認識し、住んで居る所こそ、郷土なのだという思いを深くした。

新しく区民になった人も、いずれはここが郷土となろう。そこに住む人達が、今あるものを知識として蓄え、感覚的に体に記憶されると、郷土の伝統や文化を守り、引き継ぐ力となるだろう。

土曜日が開放された児童が家族と共に、地元の昔さがしに興味を覚え、郷土を感じる様になれば、水彩都市の将来は、輝かしくなるものと思われる。

深川の川また川に花筏

江戸の下町　わがふるさと江東

千石　斉藤　惠子

本所で生まれ、移り住んだのは、当時焦土と化した深川でした。その江東の歴史を知り度いと思っていた矢先、本の好きな私は永井荷風の『深川の散歩、元八まん』等を読んで昭和6、7年頃の風景と想像もつかない現在の変わりさまをどうしても尋ねてみたいと思ったのは昭和40年頃の事でしたが、なかなか実現出来ずに年月が立って仕舞いました折、文化財講習会の活動を知り参加したのが縁です。先人達が残した文化遺跡や建物、道標等先輩達に教わり乍ら巡り、奥の深いのに驚きです。書物による江戸の下町の趣等、想像し、年毎に益々興味がわいてきます。過日、地元の婦人の集まりがあった折、猿江の小名木川橋際に建っている五百羅漢の道標の話をしたら、無関心でただ通り過ぎる人が殆どでした。身近な街角の説明板ひとつにも歴史の跡がしるされている事を話したら、皆大変興味をもち、且つ大切に保存しなくてはと関心を示し、町を歩くのも楽しくなったと感謝されました。こんな小さな事でも文化財保護のお役に立つのでは

6月の史跡めぐりで解説する斉藤さん（於、持宝院）

と思います。半世紀以上もお世話になったふるさと江東の歴史の跡を正しく後につづく若い方々に伝える活動を初心にかえり勉強しますのでよろしくご指導お願いします。

4期目を迎えて想うこと

扇橋　田中　嘉明

私は深川扇橋に生まれ、戦時中疎開をしていた4年間を除いて、現在の所に住みつづけております。

8年前には古文書講座を受講したのが縁で、平成8年に協力員になりました。3期6年間種々な活動に携わってきましたが、中でも史跡巡りガイドは、今まで学んできた成果が試されるので緊張もするが、一番やりがいのある活動です。未熟で拙い説明を、真剣に聞いてくれている受講生を前にすると、尚一層勉強しなければの思いでいっぱいです。

定点観測地図作成中の田中さん（右）

4期目を迎えて、現在協力員有志で、定点観測の撮影地点を地図上に記入する作業を行っております。文化財係には膨大な写真が貯蔵されておりますが、近い将来これらの貴重な資料がデジタル化され、IT化されて、一般の区民の方々が必要な時に自宅のパソコンを通して取り出し活用出来るようになると良いのだがと、勝手な夢を描きながら地味で細かな作業を行っているところです。

協力員活動と私

北砂　中村　冨美

江東区に居住して38年余り、子供達もそれぞれと独立し、子育てを終え、長く働いた仕事からも身を引き、自分の生活設計を見直す節目を迎えました。そんな折、区報で見て「文化財保護推進員講習会」の存在を知り、申し込みました。初級講習は、出席することに意義があると思い、通っている内に、物の見方、また新しい発見等、次々と感動しながら勉強しました。中級では、研修テーマを決めるのに、色々と考え、幾日も気持ちがゆれ動きました。今年の4月に「文化財保護推進協力員」の委嘱を受けることになりました。

今後共、お互いに協力しあい、楽しい活動をしていきたいと思います。

諸先輩方々のご指導をよろしくお願い申し上げます。

一枚の一分銀

東陽　宇田川　純正

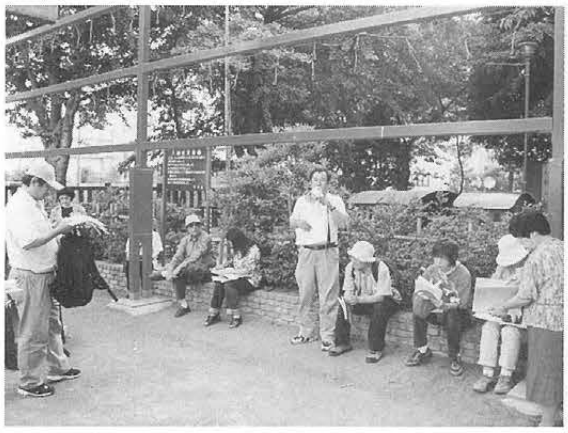
砂町の西のはずれ、六地蔵のそば、近くを流れる横十間川に掛かる豊砂橋を渡ると深川であり、潮の香と木の香の中で育った。

近所の健ちゃんと仲が良く、いつも一緒に毛利池や疝気稲荷や元八幡、時には都電で深川のお不動様や富岡八幡にも遊びに行った。小さな頃からなぜか二人共古い物に興味があり、古銭や鏃（やじり）や土器のかけら等、また何だか分からなくても古そうな物を集めては自慢し合うのが楽しみだった。とりわけ健ちゃんは古い物で気に入った物があると何時間でもじっと眺めている不思議な子だった。ある時、彼が国府台で土器のかけらが沢山出たという話を聞きつけて来た。早速、市川へ行ったのだがどこを掘ればいいのか分からない。ウロウロしているうちに畑の脇にあった肥溜にたかっていた黒くてやたら大きな蝿の大群に襲われてしまった。数千匹はいたと思う。体全体が蝿ですっぽり包まれた感じで手を振り回しても帽子ではたき落としてもまたまとわりついて来て離れないのだ。走って振り切るしかないという事になり、林と畑が続くまっ青な空の下をどこまでもどこまでも走って逃げたのは小学校6年の時だったと記憶している。

その後、彼は海外からも注目される彫刻家になってしまい、創作により専念できる広くて静かな空間を求め、こよなく愛した砂町から宇都宮へ移って行った。行く前に彼が宝物として一番大切にしていた、たった一枚の一分銀を私にくれたのだった。

その一分銀を時々取り出して見る度に六地蔵や疝気稲荷や元八幡の事を電話の向こうで気にかけている彼の顔と、二人で遊んだ遠い昔の思い出が蘇ってくるのだ。

今回、文化財保護推進協力員に応募したのは、「ふるさと江東」を離れて30数年経った今もなおこの地に残る歴史ある貴重な文化遺産がいつまでも後世に伝わるように願う彫刻家丑久保健一の熱い心に少しでも応えたいと思ったからである。



小さい頃の遊び場 富賀岡八幡宮で解説する宇田川さん

短期集中連載　船番所取調一件③

将軍の御成りと中川船番所

将軍の御成り

享保4年（1719）7月19日、将軍徳川吉宗は中川のほとりで鷹狩りを行ない、首尾良く雲雀20羽を取った後、中川船番所（大島9丁目）において休憩を取りました。将軍が中川船番所に寄ったことがわかる初めての記事で、その後も翌享保5年7月29日と同7年8月5日（以上「享保遠御成記」）、更に同17年10月4日（「有章院殿御実記」）と同20年7月11日（「御場御用留」一）、いずれも吉宗が中川船番所に立ち寄ったことがわかります。

将軍が小名木川や竪川を御座船・麒麟丸でやって来るのを「川筋御成り」といいます。享保20年（1735）7月11日、吉宗は西葛西領新田筋（墨田区・江東区）においてたくさんの雲雀を狩り、中川御番所を「御上り場」（乗下船場所）として休憩に来ました。そして、番所の前において徒士45人の水練を閲覧しています（「御場御用留」一、「有章院殿御実記」）。このとき、小休として羅漢寺（大島3丁目）に寄り、暑かったので方丈の上の間の縁側で行水したといいます（「御成御膳所書」葛西志）。羅漢寺はしばしば御膳所（休憩所）となっており、『城東区史稿』には本堂前にあった吉宗の腰掛石の写真を載せています。

このように、江戸近郊における鷹狩りを重視していた吉宗は頻繁に中川筋にやって来ました。当然、船番所の前を麒麟丸が通過したことも何度もあったでしょう。しかし、将軍が中川船番所に寄ったことや番所内部の対応がわかる史料はそう多くはありません。

中川船番所の対応

中川船番所は、中川番と呼ばれる旗本とその家臣6名（番頭2名、添士2名、小頭2名）が詰めることとなっていました。中川番は、上級旗本である寄合の中から3名から5名任命され、5日交代で勤務しましたが、自身が番所に行くことは将軍の御成りのときぐらいでめったにありませんでした。

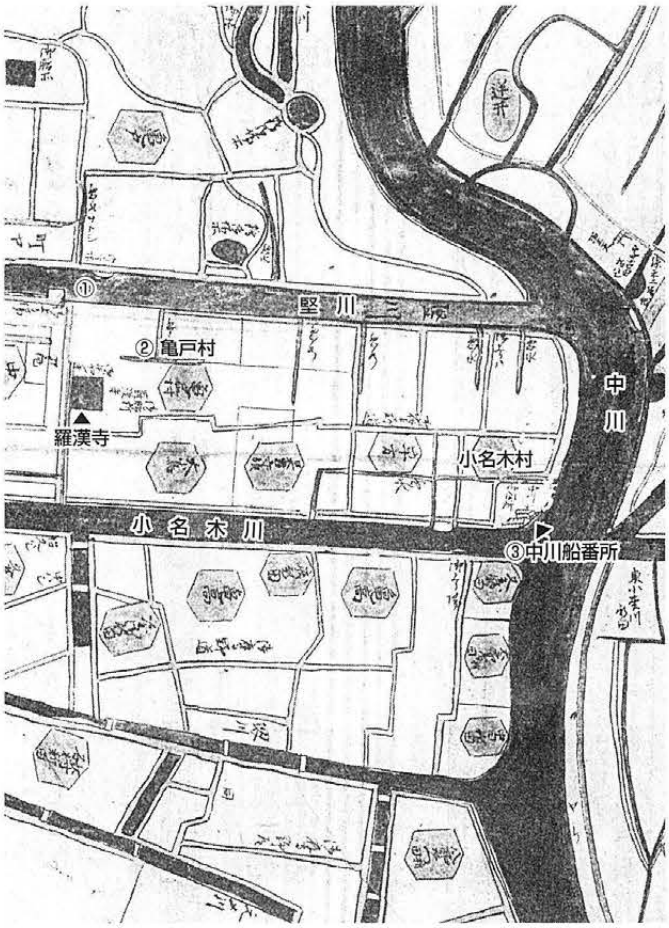
将軍の番所御成りに対する番所内の対応がわかるのは、享保4年7月19日の御成りです。7月16日、若年寄大久保常晴より中川番に対して、来る18か19日に御成りがあることが伝えられ、当日の当番役人を知らせるよう指示がありました。17日の当番役人は松平壱岐守定昌でした。その上で翌17日、吉宗側近の御小納戸頭取・松下専助らが番所にやってきて様々な指示をしています。御成りの際、番所木戸口の外に出てお目見えすること。定昌の家臣も56間後ろに下がって平伏すること、お目見え終了後は（小名木村？）名主忠右衛門方へ下がっていること、将軍が番所を去り次第、番所に帰って勤務すること、などほかにも役人の服装から台所の調度品までこと細かに指示が与えられています。

中川船番所に詰める役人は普通の外番所とは異なり、未明の御成りであってもお目見えすることが要求され、果たせない場合でも、将軍の帰途のときに拝謁するよう定められています（以上「中川御制札記」）。

結局、吉宗は当初の予定通り、19日に両国橋より乗船し、竪川を進んで①本所五ツ目御上場（大島2丁目）から上陸し、②亀戸村（この場合、大島3丁目付近）で鷹狩りを楽しんだ後、③中川船番所に入りました（享保遠御成記）。

番所の役人らにとって、将軍にお目見えを果たすことは身の光栄だったのでしょうが、反面緊張の連続であったに違いありません。

（文化財専門員　今野慶信）



文化2年「葛西筋御場絵図（部分）」独立行政法人国立公文書館内閣文庫所蔵
中川御関所、御膳所羅漢寺、御鷹野道などが見える。

芭蕉記念館 新展示

◎中世から近世の連歌師
◎芭蕉の人生と旅、他

12月15日（日）まで

今回は、これまで未見とされる飯尾宗祇の［千句連歌のうち宗伊・宗祇抜書帳］や、［北村季吟極・山崎宗鑑筆「風雨」書幅］などの初公開資料を含む、当館が所蔵する連歌師13人、20点の資料を公開しています。

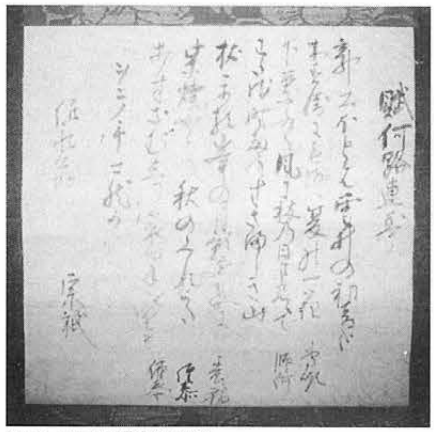
◎中世から近世の連歌師

連歌の歴史は古く一説には『万葉集』にまで遡ると言われています。

初期の連歌は和歌の上句・下句の唱和による「短連歌」が主でしたが、時代が下るとともに「鎖連歌」、「長連歌」とその形式を変えていきました。

また、和歌の余興として楽しまれていた連歌は、次第に宮廷連歌として文芸的な性格を帯びていきます。

鎌倉末期頃、連歌は宮廷だけでなく、広く庶民の間にも普及していきます（地下連歌）。こうした中で二条良基は准勅撰集『菟玖波集』や連歌式目『応安新式』によって宮廷連歌と地下連歌の統一をはかり、文芸としての連歌の地位を築きあげました。



紹永あて宗祇筆書状
賦何路連歌（文明4年ヵ）

やがて室町時代になると、宗砌・智蘊ら優れた連歌師たちが登場し、応仁の乱（1467）前後には「連歌七賢時代」と呼ばれる連歌の中興期をむかえます。そして飯尾宗祇により第二の准勅撰集『新撰菟玖波集』が撰進されるに至って、ようやく正風連歌が確立されました。

室町後期から江戸初期にかけて里村紹巴を中心に連歌は最盛期をむかえます。しかし、式目の煩雑化や強制は、連歌本来の自由な表現の妨げとなり、逆に固定化・停滞化を招きました。その結果、連歌は新興の「俳諧」によって徐々にその文芸としての地位を奪われていくことになります。

今回の展示では、このような連歌の歴史の中で主に中世から近世にかけて活躍した連歌師たち13人の資料20点を取り上げて展示します。

では、資料の一部をご紹介します。

千句連歌のうち宗伊・宗祇抜書帳

百韻十巻で構成される千句連歌から、宗伊・宗祇の句を抜書きして一冊にまとめられたもので、書写した人物は不明。原本になった千句連歌は今まで存在が知られていなかったもの。他の連衆・興行時期・興行場所など詳細なことはわかっていませんが、宗祇の新たな連歌活動を知る上で大変貴重な資料といえます。

季吟極・宗鑑筆「風雨」書幅

山崎宗鑑筆といわれる「風雨」の書に北村季吟が極書と句を付したもの。季吟は宗鑑の筆の勢い・字の形を評するとともに、自身の句について当時所有者であった井口如貞に請われて「やむことを得ずして書きけがせり」と、付すに至った経緯を謙遜を込めて述べています。

季吟極・宗鑑筆
「風雨」書幅

連歌新式並新式追加今案等

元禄13年（1700）、尾張に住む周和子の講説を受けた小子盛之が、後日夜勤の折に暇を見つけて講説の内容を清書したもの。多くの朱書からは、連歌式目が元禄期の人々にどのように理解され、学ばれていたかがうかがえます。

また、江戸時代を通じて正月の幕府連歌始で第一の連衆をつとめた里村家の人々を、自筆短冊のほか、写本やパネルを使って紹介しています。パネルでは、里村北家・南家系図のほか連歌の歴史についても解説しています。

里村紹巴等著　賦何船連歌

文禄2年（1593）10月23日に興行された百韻連歌のうち、初折22句を軸装したもの。紹巴以外の連衆には息子の玄仍や、里村南家の昌叱と景敏（のちの昌琢）父子、武将としても知られる玄旨（細川幽斎）など、13人の名が見えます。

このほかにも、牡丹花肖柏筆「月まつと」歌短冊・柴屋軒宗長筆書状（2月19日付）・三条西実隆筆「梅をかざし」歌短冊・幽斎筆「ねがはくバ」歌短冊・幽斎筆書状（9月10日付）・木下長嘯子筆「あだものと」歌短冊・紹巴筆『連歌至宝抄（写本）』・紹巴筆

『称名院追善千句注（写本）』・昌琢筆書状（3月18日付）・昌琢筆「鶯に」発句短冊などを展示しています。

◎芭蕉の人生と旅

伊賀上野（現三重県上野市）で生まれてから大坂で没するまでの51年にわたる芭蕉の人生を、［深川草庵への移居］・［『おくのほそ道』の旅］など17項目にわけて紹介しています。各項目には解説文とともに、それぞれに関連した資料や写真35点を併せて展示しているので、今まで芭蕉についてあまり知らなかった方でも、芭蕉の生涯や深川との関係などについて簡単におわかりいただけると思います。（野村順一）

※　※

現在芭蕉記念館ではオリジナルクリアファイル（全3種類・各300円）を販売しています。博物館見学や史跡散策の際に資料やパンフレットを入れて持ち運ぶのに便利です。来館の際にお買い求め下さい。

［芭蕉記念館］

開館時間　9時30分～17時（16時30分までにお入りください）

休室　月曜日

入館料　大人100円　小中学生50円

交通　都営新宿線・大江戸線森下駅下車徒歩7分

問い合わせ　芭蕉記念館（常盤1―6―3）TEL03―3631―1448

肖柏筆「月まつと」歌短冊

伝統工芸保存会
大岩仲治前会長に感謝状！

去る5月14日に清澄庭園涼亭において、昭和57年の江東区伝統工芸保存会の発足以来20年の長きにわたって会長を勤めてこられた大岩仲治前会長（現在は常任相談役）に、室橋昭区長より感謝状が手渡されました。

大岩氏は、明治44年御船蔵前町（現新大橋）で生まれ、父平次郎氏について漆工芸（食器・家具への漆塗装）の技術を修業され、父の跡を継がれました。昭和56年江東区登録文化財、平成元年江東区指定文化財に認定され、江東区伝統工芸保存会会長のほか、東京都伝統工芸技術保存会会長（平成4～14年）も歴任され、江東区自治功労賞（昭和48年）、東京都優秀技能者（昭和62年）、東京都文化功労賞（平成10年）などを受賞されています。

実演中の大岩前会長（伝統工芸展にて）

江東区伝統工芸保存会は、現在33名の職人さんで構成されていますが、江東区伝統工芸展への参加や夏休み職人の技体験講習、チャリティーバザーの開催など職人のまち江東区の伝統的な工芸技術の保存・普及に尽力されています。

ココにも歴史があった

四方の皆々様、益々御嬉嬉よく渉らせられ大慶至極に存じます。

オレンジ色のビラは深川区和倉町24（現深川2）の坂田留吉宅で販売されていた「家庭用箱風呂」の広告です。船大工だった福住の東島保二さんに寄贈していただきました。

広告によれば、箱風呂は尾州檜の赤味材で、1人用から4人用まであり、長さは3尺から4尺、幅は2尺から2尺5寸、深さは2尺1寸から2尺5寸で、ガス釜付きのものと付かないものがあり、値段は34円から77円までした。30分以内には必ず沸くとうたっています。東島さんが大正14年3月14日から付けていた「造船控帳」という黒い手帳に箱風呂の寸法が記録されています。

当時主流は銭湯で、内風呂が普及するのは昭和30年代からになります。

次号は9月27日発行予定